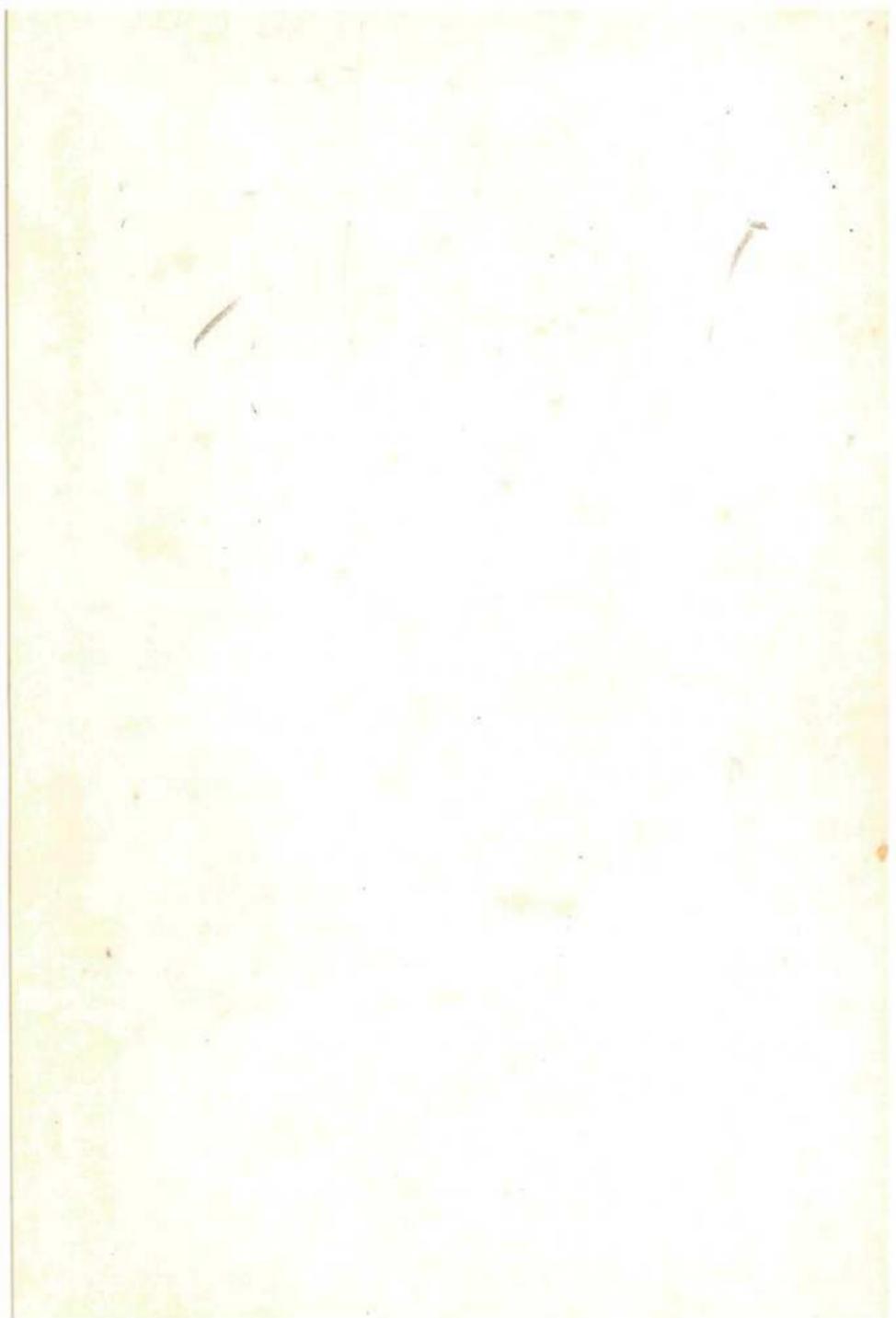


静岡県小笠郡大須賀町文化財調査報告書第一集

遠江国横須賀城址
調査報告書

静岡県小笠郡大須賀町
大須賀町教育委員会



序文

室町時代の末期、徳川家康の部将大須賀康高の築いた横須賀城。江戸時代を通じて横須賀領藩政の中心であった横須賀城。その城址が本町横須賀の西端に残っています。そこは、郷土住民の心のふるさとであって、松吹く風も池の面に映る月も常に往時を物語っています。

この度、本町教育委員会は時勢の推移にかんがみ、専門家の諸先生の御尽力を得て、横須賀城地並びに横須賀城関係文化財の調査を実施し、よくその成果を収め、ここに詳細な調査報告書の完成を見るに至りました。本町にとって誠に大きな喜びであります。

祖先の残した文化を大切にすることは、今生きているものの重要な任務だと信じます。それには先ず、文化財そのものを探ることが必要であります。この調査報告書によって一人でも多くの人々が横須賀城に関する知識を一層深くし、また文化財に対する関心を一段と嵩められるよう切望いたします。

横須賀城に寄せる心は、郷土愛に通じ、郷土愛は、郷土の発展に通じます。時には、城址の丘に登って歴史を回顧するとともに文化都市大須賀町の将来を展望いたしたいものと思います。

昭和四十九年四月一日

大須賀町長 鹿田喜平

調査報告書刊行のことば

横須賀城は、今からおよそ四百年前天正年間に築城され、明治維新に際して廢城となりました。廢城となつてから既に百年を経過していますが、幸にして城址は、今なお昔の面影を存して、本町の貴重な文化遺産となっています。然るに近年土地開発が盛んに行なわれ、その影響は、城址の破壊に及ぶに至り、原型の消滅を憂うる声がにわかに高まつてきました。

このような情勢のため、本町教育委員会としても、文化財保護の立場上早急に城地調査を実施することが必要となり、昭和四十七年一月調査に着手いたしました。調査は専門家に委嘱することとし、その道の知識経験等の豊富な安本博先生、神村清先生、細井淳志郎先生にお願いいたしました。三先生には繁務の余暇を割かれ、約三か月にわたつて補助員を指導するなどして、現地の測量、地勢地質の踏査、関係文化財の視察等、綿密周到の調査を遂げられ、ここに横須賀城の全貌を明らかにする詳細な調査報告書の作製を完了せられました。

本調査報告書は必ずや横須賀城及びその関係文化財に対する認識を一段と深めるにとどまらず、広く学界に重要な研究資料を提供するもので、今回行なつた調査の意義を十分に顕現しているものと信じます。

三先生の御労苦に厚く感謝申しあげ、併せて調査に御協力いただいた多くの方々に御礼申しあげ、本調査書刊行のことばといたします。

昭和四十九年四月一日

大須賀町教育委員会

教育長　岡本七郎

例



写1：横須賀城址調査報告者

例 言

一、本調査報告書は、静岡県小笠郡大須賀町教育委員会が昭和四十七年一月より四十八年にわたり実施した横須賀城址調査の報告書である。

二、この調査は、大須賀町教育委員会が、はじめて行なった学術調査で、大須賀町文化財専門委員会が担当した。よって調査期間、静岡県埋蔵文化財調査委員、日本考古学協会会員安本博、静岡県文化財専門委員神村清、静岡大学教育学部助教授細井淳志郎に調査を委嘱した。

三氏は駿府博物館学芸員安本収、国学院大学史学科学生本沢慎輔、静岡市史編集室杉山彩梧、静岡大学教育学部学生大谷徹、二宮英喜、長田茂ら三君を助手として、本格的調査を実施した。

三、調査期間中、地元大須賀町、鈴木純、鹿田喜平、小野雄一郎、天野勲、白石銀次、松浦源一、赤堀儀平、若松和一、平松庄作、名倉春一、阿部喜史、高橋由次郎、土屋繁雄、大石正次郎、中山才次郎、平松幸吉、藤原清、田中初男、山下伊三郎、大場敏郎、秋山善一、平松五平、水谷鉛一、大石六明、大石高、山下歎、伊藤勉、蒲原安一、



写2：大須賀町文化財専門委員ほか歴史調査関係者

早間清、大石豊平、松下瀬平、山下六郎、服部伊平、金原弘、石原春雄、泉敬常、太田博明、松本俊男、桑原繁敏、立石忠、桑原武、横山菊男、水谷貞一、岡本七郎、別所一次、羽田昭治、鈴木健太郎、浦野賢司、田中弘、博松美津子、杉山ふみ子、久野みえ子、富田実、戸塚良平、松本すが子の諸氏の協力をうけた。（写1）また調査地となつた松尾町および横須賀城関係史跡の各位から、種々便宜を与えられ、調査、研究のうえ、好結果をもたらした。ここに厚く御礼申上げる。

四、本調査報告書の作成には、調査員安本、・神村・細井があつたが、資料開発、調査には、大須賀町教育委員会、同町文化財専門委員会、大須賀町役場諸氏の指導をうけ大いに裨益されるところがあつた。各位のご協力なくして本調査報告書は纏らなかつたであろう。更めて感謝の意を表したい。

昭和四十九年四月一日

編者 安
本

博

遠江国横須賀城址調査報告書目次

序文	鹿田喜平	第二節 城址の現状と概要	一一一
調査報告書刊行のことば	岡本七郎	図版2(折込)遠江国横須賀城址埋立図	
例言	安本博	第三章 横須賀城址周辺史跡の予備調査	
挿図目次		安本博	三三三
図版目次		予備調査	三五
はじめに	安本博	第二節 横須賀城史関係資料の開発と調査	三七
遠江国横須賀城址調査について			
一、調査の契機		第一節 大須賀町所在の町指定文化財の対象となる物件の 予備調査	三九
二、調査は実測図作成から			
三、調査方法		第二節 城郭とその問題点	四〇
第一章 横須賀城址測量調査	安本博	第一節 城郭周辺の自然概況	四一
第一節 横須賀城址測量日誌	清一三	〔一〕弁財天川下流低湿地の形成とその発達	四二
国版1(折込)遠江国横須賀城址実測図		〔二〕城下町の位置づけと弁財天川沖積低地	四九
		〔三〕城下町の土地基盤としての西大谷川扇状地	五〇
		〔四〕西大谷川押し出し状扇状地と城下町	五三

第四章 横須賀城址の規模 安本 博...五七

第一節 横須賀城裏沿革史 五八

第二節 横須賀城の昔説と作事 六七

第三節 町指定文化財より知る横須賀城 六八

一、古記録 六八

二、横須賀城の城と鬼瓦 七〇

三、横須賀城二ノ丸の井戸枠 七〇

四、歴代城主の墓塔 七一

五、横須賀城の城門 七二

あとがき [OII]

執筆者略歴 [OII]

第五章 城下町と城郭の構造とその変遷.....

細井淳志郎...七三

第一節 城郭と城下町の構造的特色 七三

第二節 城下町の寺院配置とその招致 八四

第三節 城下町周辺の村落と侍町の変容 八五

挿図目次

例 言	写 1	横須賀城址調査関係者	三
	写 2	大須賀町文化財専門委員はか城址調査関係者	四
はじめに口絵		横須賀城址に建てられた記念碑	九
	写 1	横須賀城址展望	一一
第一章 口絵		調査前の打合せ	一三
第一節 写 1		調査にさきだち、大須賀康高の墓前に参拝	一五
写 2-(1)		三日月堀より本丸への道付近から測量	二〇
開始			
南濠址の測量	写 2-(2)	南濠址	一七
敵心山東側台地東裾付近杭打	写 3-(1)	敵心山東側台地東裾付近杭打	一八
敵心山東側台地東北裾付近杭打	写 3-(2)	敵心山東側台地東北裾付近杭打	一九
大空濠底の測量	写 4	大空濠底の測量	二〇
圖版 1 さき遠江国横須賀城址実測図			
第二節 写 1		横須賀城址遠望	二二
横須賀城址埋立図	写 2	天守台址	二三
國版 2 さき遠江国横須賀城址埋立図		天守台址	二四
本丸より「西の丸」・「二の丸」を望む	写 3	本丸より「西の丸」・「二の丸」を望む	二五
不開門より「西の丸」を望む	写 4	不開門より「西の丸」を望む	二六
三の丸より天守台を望む	写 5	三の丸より天守台を望む	二七
北の丸曲輪	写 6	北の丸曲輪	二七
大空濠「三の丸」入口	写 7	大空濠「三の丸」入口	二八
東方の台地地形	写 8	東方の台地地形	二八
外濠不開門から東へ	写 9	外濠不開門から東へ	二九
外濠（東西大手門に面するところ）	写 10	外濠（東西大手門に面するところ）	二九
11			

第二章	口絵	三月池	三〇
	写 14	北濠遺構	三一
		横須賀城天守台址	三二
第三章	口絵	横須賀寺山門	三三
	写 1	恩高寺に保存される瓦	三四
第一節 写 1		恩高寺に保存される鬼瓦と瓦当	三六
第二節 写 1-(1)		明治5年5月御用留表書	三七
	写 1-(2)	明治5年5月御用留表書	三八
第三章	口絵	手前右側本丸の西端	三九
	写 1	遠方横須賀寺山	三四
第二節 国 1		遠方横須賀城周辺地域の地形と城郭の位置図	四二
國 2		横須賀城周辺地域の地形区分図	四三
	写 1	弁財天川下流低湿地域	四三
	写 2	石津付近から北方の低湿地帯と丘陵縁の三輪・柏木・清ヶ谷各部落を望む	四五
	写 3	海岸寄りの砂丘断面の一部	四六
第四章	口絵	新川河川改修工事の石津現場における露出地層	四六
	写 1	横須賀城周辺地域の土壤分布図	四七
國 4	写 5	新川石津橋南方手前旧新川	四八
	写 6	西大谷川の天井川化の姿	五一
	写 7	三熊野神社裏山土壤断面	五二
第一節 写 1		横須賀城古跡大須賀氏の墓塔	五七
	写 2	「王子推現由来記」表紙	五八
	写 3	「王子推現由来記」本文	五九
第二節 写 1-(1)		磐田郡浅羽町にある馬伏塚城址	六〇
写 1-(2)		明治5年御用留帳より	六五

目 次

八

写 1 — (3)	明治 5 年御用留帳より
写 2 — (2)	城址古絵図
写 3 — 1	恩高寺に残る鬼瓦

第三節

写 1

恩高寺に残る鬼瓦

六七

六九

七一

七二

七三

七四

七五

七六

七七

七八

七八

七八

八一

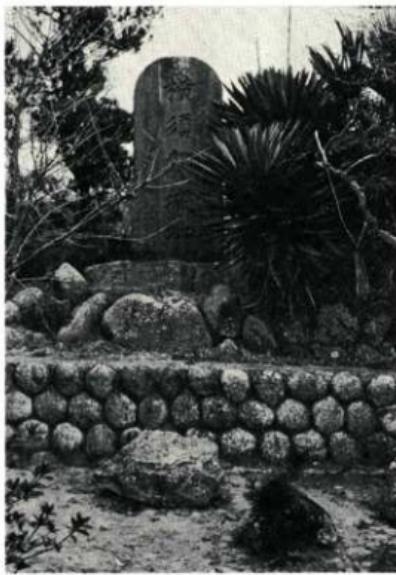
八二

八三

八四

八四</

はじめに



写： 横須賀城址に建てられた記念碑
(図版11-1)-(2)参照)

四

次

四二六

遠江国横須賀城址調査について

- | | |
|--------------|----|
| 一、調査の契機 | 一〇 |
| 二、調査は実測図作成から | 一一 |
| 三、調査方法 | 一二 |

遠江国横須賀城址調査について

一、調査の契機

昭和四十六年（一九七一）十二月二十五日

新年早々ままず調査

静岡新聞総合版（第一〇八九九号）は、宅造か、保存か窮地に立つ横須賀城址。という記事で、横須賀城址の調査を伝えた。（下記）

二、調査は、実測図作成から

小笠郡大須賀町所在の横須賀城址の一部は土地開発のため、破壊の対象となつたので、大須賀町教育委員会は、文化財保護対策の一環としてこれが緊急調査を実施し、その前後委員会に諮問した。

大須賀町文化財専門委員会は、調査対象を次ぎの三点に絞つた。

1、横須賀城址の測量と、その周辺史跡の予

開発の前に風前の灯となつて、いた小笠郡大須賀町松尾町の横須賀城址が、関係者の努力と協力でいったんは危機を脱した。新年早々、専門家による調査が行なわれ、その結果を持って町または県文化財として保存される可能性も強いが、宅造を計画している所は現状のままでおくなら宅造する。史跡公園にするなら貰い取ってほしいといつており、予算不足の町関係者は弱りきっている。

横須賀城址は、徳川家康が三河から浜松城へ進出したときの最前線基地。武田の前線基地小笠郡東村の高天神城と相対するため、天正六年（一五七八年）大須賀五郎佐衛門尉康高に築かせた。城は標高七十尺の丘陵にあり、南は遠州灘、北は小笠山連峰を負い、浜街道の要地を占めている。戦国騒乱のさなかに出来た家康の出世城、騎馬戦から火器を使用した戦いに転換する過渡期のもので、激しい攻防戦に備えた戦闘的な城といふ特徴をもつていて。

明治四年（一八七一年）に廃城となり、城址は現在、茶畠と原野の民有地、約一㌶を十四人で所有している。由緒ある城址だが、文化財指定の対象となつていなかった。地城開発が進み同城址付近も住宅地として着目されるようになった。

土地所有者は同町内の開発会社豊遠土地開発（増田徹）に依頼して土をどうでもら



写1：横須賀城址展望（南東より望む）

い、跡地を宅地造成することを相談した。土地を求めていた同社だが、同所が由緒ある城址と聞いたのでどうしたのかと町当局、町教委へ相談。びっくりした鹿田喜平助役、岡本七郎教育長の奔走で肩代わりの採土場をあっせん、とにかく急場は切り抜けた。

この間、土地所有者とも話し合い、開発会社、土地所有者の協力で城址の調査をすることになった。調査には県文化財専門委員（建築）神村清さん、静岡大学助教授（地質、地形）細井淳志郎さん、県埋蔵文化財調査委員（歴史）安本博さん、それに地元の大須賀町文化財調査委員、撰要寺住職泉敷常さんら五人。それに静大生が協力する。

調査は一月八日から一月いっぱいの予定。問題は調査後の措置。土地所有者は現状のままで置くならば記録が出来た段階で宅造したい希望、史跡公園などの形で保存するならば買い取ってほしいという。

町としては苦しい予算の中で買い取るのはむずかしいとまだ結論が出ていない。しかし、調査に当たる人たちは、町が県の文化財に指定するにふさわしいものであり、調査の結果をまって、できれば史跡公園として保存したい—という希望が強い。

年 度 内 に 実 測 図

横須賀城址 現地調査始まる

開発か保存かで注目を集めている小笠郡大須賀町松尾町、横須賀城址の現地調査が八日午後二時から始まった。

備 調 査

2、大須賀町所在の町指定文化財の対象となる物件の予備調査

3、横須賀城史関係資料の開発パトロールと点検

よって調査対象は近くまでも横須賀城址の

実地調査と測量に主目的が置かれ、あわせて町所在の文化財の縦点検を行なって、文化財目録の作成と、将来、大須賀町史編集事業の地図めを行なうことになった。

三、調査方法

1、調査主体 大須賀町教育委員会

2、調査員 助手 例言に記述した通りである。

補助

3、調査日程 昭和四十七年度

調査終わり次第、調査報告書を作成することになった。

い。

調査に当たるのは神村清里文化財専門委員、細井淳志郎静大助教授、安本博日本考古学協会会員のほか助手二人、補助員静岡学生三人、大須賀町文化財専門委員五人、同日現地で顕合せ、直ちに調査のための打ち作業に入った。八、九、十五、十六、二十二、二十三、二十九、三十日の一月中の土、日曜日を使って実測図を作成、二月末までに図面を作り、三月いっぱいに報告書を作成、大須賀町文化財審議会、同町、同町教育委員会、県文化財審議会にそれぞれ提出する。

同城址は現在、山林原野と茶畠になつていて民間所有地。土砂をとつて宅地開発するということから、開発が保存をめぐって、関係者の注目を集め、急ぎ今回の調査となつた。

横須賀城は、池川家康が三河から浜松城へ進出したときの最前線基地、小笠郡城東村の高天神城と相対するため、天正六年（一五七九年）大須賀五郎佐衛門尉康高に命じて築かせ、明治になって廢城になつた。

標高七十坪の丘陵にあり、南は遠州灘、北は小笠山連峰を背負い、浜街道の要地。家康の出世城として知られ、戦国時代の戰法が弓矢から火器に移る時代の城として文化財としての価値が高い。

ところが、どうした手違いか、町、県文化財の対象からもれていた。開発問題が起きたとき、何ら保護対策もとることが出来ず関係者をあわてさせたが、地主や開発会社などの全面的な協力を怠地化を中止、調査することになった。

調査関係者の間では将来、出来るならば史跡公園として保存したいという意見が強

第一 章
横須賀城址測量調査
神 安
村 本
清 博



写：調査前の打合せ

目 次

第一章 横須賀城址測量調査	神 安	一三
第一節 横須賀城址測量日誌	神 村	
第二節 城址の現状と概要	神 村	
一、城址の形状と規模	清 博	一四
二、部分解説	清 博	一一一
	神 村	一一一

第一節 横須賀城址測量日誌 神村清

遠州横須賀城は、静岡県小笠郡大須賀町地内松尾町の丘陵にあり、南は白砂青松の遠州灘をのぞみ、北に小笠山の丘陵を背負う海岸沿いの要衝の地であった。

その築城は、天正六年（一五七八年）、浜松在城の徳川家康が家臣大須賀康高に命じて築城せしめたものといわれているが、その城址は、今まで正確な測量が実施されたことがなかった。

最近の開発の波、緑の破壊はこの大須賀町にも及ぶ状況となり、大須賀町教育委員会は、横須賀城を中心とした城下町横須賀の歴史を解明するとともに、城址の正確な測量図を作製して後世に残すこととなり、昭和四十七年一月よりその調査に着手したもので、以下はその測量日誌である。

一月八日（土）晴

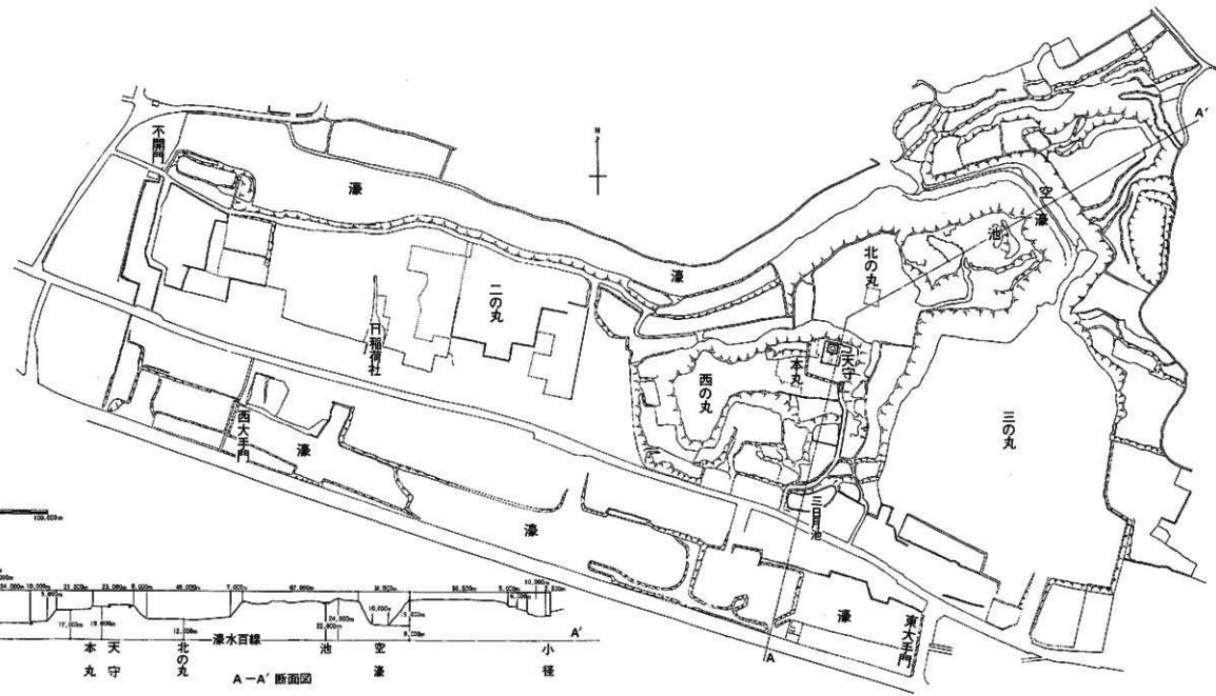
本日より、原則として毎土曜日、日曜日を利用して、南遠小笠郡大須賀町に残る横須賀城址の実測調査を実施することとなつた。

午後一時、静岡を出発し、予めの打合せに従つて、大須賀町地内松尾町公民館において、地元関係者一同と落合い、勢揃い、初顔合せの後、地元教育委員会の方針に基いた調査方法の確認打合せを実施し、一同まず撰要寺墓地に赴き、初代城主大須賀康高、二代城主松平出羽守忠政の靈に参詣、城址調査の報告をした後、一同城址を一巡し、その概要を掌握し、要所に測量杭を入れて、測量準備を行なう。

測量範囲は東端を大空堀東側台地の東裾から太鼓櫓を結ぶ線、及び東大手門址付近、西端は西大手門址を更に城濠に

圖版一
遠江國橫須賀城址実測圖

卷之三



沿って西進し、県道より撰要寺へ通ずる道路の線、南端は城濠の南縁にそつて現在の県道の通する線、北端は城濠の名残をとどめる湿田地帯までと設定し、主要箇所一本の横断面を測量することに決定した。測量に要する平板器械類一式は大須賀町教育委員会が手配し、松尾町公民館を根拠地として測量を実施し、宿泊をする場合は町指定の旅館等を利用することとし、第一日の現場打合せを終わる。

全員宿舎に引揚げ、夜間は明日よりの具体的行動について詳細打合せを行なう。

一月九日（日）晴

午前九時宿舎出発、平板測量に着手する。人員の関係上、測量班を二班に編成し、その一班は東大手門址付近を起点として南城濠に沿って西へ進み、西大手門址付近をへて、県道より撰要寺へ向う道路を北上することとし、他の一班は、まず本丸から本丸御殿址と呼ばれる付近に下り、三日月池の北縁をかすめて北の丸の台地へと進み、本丸の北側を測量しつつ西進し、西から東進する班とドッキングし、まず本丸を中心とした城址の測量を終えた後、敵應山、大空濠及びその東側台地、北側湿田地帯、太鼓櫓周辺を最後にして最初の測量地点、東大手門付近へ戻ることとし、その方針の概略を決定する。

第一日の測量に於て、一班は東大手門跡付近の城濠周辺、他の一班



写1：調査にさきだち、大須賀康高の墓前に参拝



写2-(I)：三日月堀より本丸への道付近から測量開始

は本丸周辺の概要を知る測量を終わる。

名物の空つ風吹いてテープ飛び、測量は難波する。

一月十六日（日）晴

一月十五日、雨天のため測量を中止したので十六日は早朝七時出発して、協力の静大生とともに横須賀城址へ向かう。午前九時より測量作業に入る。静岡は静穏でも、雨あがりの遠州地方の冬は名物の空つ風が一日中吹き荒れて、測量テープが風に飛ぶ中を一日中測量を実施する。強風にわざわいされ、測量の進度はおそらく、あまり進捗しない。

一月二十二日（土）晴

前回に引続いて測量範囲を先にのばす。一班は、南城濠に沿って西進し、撰要寺への道路の線に到着し、南城濠南縁、北縁、西大手門付近の樹型、石墨等を確認、他の一班は本丸の南の一段低い台地を測量し、三日月堀をかすめて北へ進み、北の丸方向を目指す。

一月二十三日（日）晴

冬の遠州地方は晴れれば空つ風、静穏なれば雨といった天候で、名物の空つ風に悩まされた測量は、特に風当たりの強い本丸西方は困難を極めるが、西へ進んだ一班は不開門址周辺へ進出し、他の一班は、北の丸を中心とした本丸

北西の測量に重点をおく。不開門址周辺では城濠名残の石塁や、低い茶烟の中にかつての城濠であつたらしい形跡を認め、北の丸では敵応山への昇り口、北側斜面上の土塁跡とおぼしき部分の測量を実施した。

一月二十九日（土） 晴



写2-2：南濃瀬の測量址

風無く、珍らしくおだやかな測量日和、測量大いに進捗し、西の一班は西端をまわり不開門址付近より二の丸をのぞみ、他の一班は、北の丸より西へ向かい、本丸の北側、二の丸への茶烟をのぞむ所まで進出し、西からまわって来る測量班とのドッキングも近い。

一月三十日（日） 晴

昨日の測量日和は一夜にして一変、天気は晴天であるが、名物空つ風は、終日吹き荒れて寒中らしい一日であった。

西班は、順次東進を開始し、北の丸より進む一班も、土砂採取によつて旧跡を失つた平地付近にまで進出し、本丸「御殿址」と称する台地も測量し、相呼応する地点にまで到着する。

二月十二日（土） 晴

実測は二の丸「御殿址」と称する茶烟まで進出し、旧石積の実測確認も完了し、本丸を中心とする一帯の測量は一部分を残して概ね終り、敵応山大空壕等のある東北方向へと平板を進出させることにする。



写3-1(1) 故応山東側台地東端村近杭打（城址東端付近）

一日の晴天を祈つて、曇り空を仰ぎつつ、午前九時測量を開始したが、天候のもつたのは午前中のみ、午後は雨天となり、残念乍ら測量は中止せざるを得なかつた。

町民有志集つて、今度の測量範囲中の最大の難所である故応山一帯の下刈りを実施してくれ、今後の測量の進展に大いに役立つ。

本日の測量は雨を考慮して、松尾町公民館周辺に測量地点をしぶり、三日月池西側より公民館裏出の斜面、及び台地の一部の測量のみに終る。

二月十九日（土）

二月二十日（日）

兩日とも、測量を中止し、休養日とする。本日までの測量を検討整理して今後の測量に備える。

二月二十六日（土）雨

二月二十七日（日）

雨のち晴

天候不良のため測量は中止する。

三月四日（土）

晴

北の丸東北隅に測点を設定し、いよいよ敵応山への測量にとりかかる。山地のため、黒松等の樹木や下草類の雜木、自生の竹、つる草等密生し、加えて土地の高低差、急勾配があり、測量は難行するが、漸くにして斜面を終わり、山頂の台地へ進む。



写3-②：敵応山東側台地東北裾付近杭打

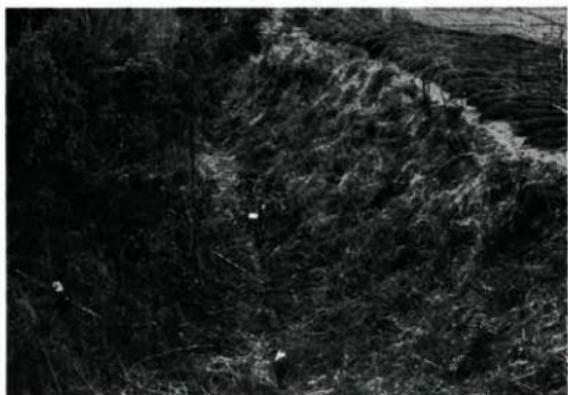
三月五日（日）晴
終日、難攻の敵応山に取組む。山頂の用水池を取り囲むように、南より東方、東北方にかけて築かれた土壠、土壠の東南側に一段と低く東西にのびる曲輪、北の丸へ下る通路の下り口等、密生した自生竹林の中に順次全容を表わしていく。

三月十一日（土）晴

大空濠をこえて、東北の茶畠台地に測点を移動し、大空濠の肩線を確認するとともに、茶畠台地より東方斜面並びに大空濠底の測量に進み、いよいよ大詰めの段階をむかえる。

三月十二日（日）曇

大空濠底及び、その東側台地の茶畠及び周辺の曲輪とおぼしき段斜面、東側凹地周辺から工場敷地東側の平地へと平板を進出させる。大空濠底の測量は、その南端の工場敷地への開口部にまで進出し、工場敷地周辺測量のための測点を設定する。



写4：大空濱の底空濱測量

四月一日（土）晴

測量は最後の段階に入り、大空濱南口の測点より、工場一帯の測量を終わり、東端太鼓櫓周辺の確認、敵應山より北の丸への下り口に呼応した。北の丸よりの上り口を測量して通路を上下両方面よりドツキング完了。

四月二日（日）曇

平板は再び、最初の測点である東大手門跡付近に戻り、遂に城域を一周、人家の間の石垣、三日月堀、旧県道沿いを測量し、最後の誤差修正にかかる。

自四月十日
至五月十日

一ヶ月間断続して、三ヶ月に亘る測量元図の整理を実施し、最初の実測図作製を終るとともに残余の実測地、追加測量地域、不明部分の再確認を行ない、次の最終測量に備える。

五月二十一日（日）晴

残余の実測地である北側低湿沼地帯に残る城濠跡の田園の測量を完了し、倉庫跡畠地、撰要寺入口付近の道路を補正し、松尾町公民館付近の修正を最後に、本日を以つて平板測量を完了した。

五月二十五日（木）晴

断面図調製のために、南城濠沿いの県道より城濠を横断し、旧道をこえて三日月堀を縦断して本丸に登り、更に北の丸台地を経て敵応山頂用水池を横断し、大空濠をこえて東北台地を横断する線に断面を設定して、高低測量を実施し、実測はすべてを完了する。

自五月二十九日（月）

至六月十五日（木）

事務所に於て、元図を整理補正、修正を加え、正式に遠州横須賀城址実測図を製図し、作業を終わる。

一月八日実測を開始してから丁度六ヶ月を要して測量は完了したことになる。

遠州名物の寒い空つ風が吹きさび、松内の気分も抜けきらぬ着手の頃は、茶の芽は固く路傍の雑草もすっかり冬枯れて、僅かによもぎ、たんぽぼの類が緑をのぞかせて春を待っていたが、測量の作業は意外に手間どり、節分もすぎ、桃の節句も終わり、三熊野神社の祭り喧しも城址の台地上で聞いた。

最初の頃は寒風に悩まされ、敵応山では、つる草に難渋し、蚊にせめられ、最後の北側低湿沿地には足をとられ、現地での測量が終わった頃、端午の節句もとうにすぎて間もなく梅雨に入ろうとしていた。

長かった六ヶ月をかえりみて、まず思うことは、町教育委員会はじめ地元関係者の極めて深いご理解と積極的なご協力であり、筆舌につくし難い感謝の念でいっぱいである。

最後にこの測量と製図にご協力下さった学生諸君を列記して感謝の意を表わすとともに記録にとどめる。（順不同）

安 本 収 国学院大学史学科学生（現駿府博物館学芸員）

本	沢	慎	輔	国学院大学史学科学生
杉	山	彰	梧	静岡市役所市史編集室
大	谷	徹	穂	静岡大学教育学部学生
二	宮	英	喜	静岡大学教育学部学生
長	田	茂	喜	静岡大学教育学部学生
久	保	治	神村建築設計事務所所員	神村建築設計事務所所員
保	山			
幸				
久				
保				
山				
幸				
久				
保				
山				
幸				

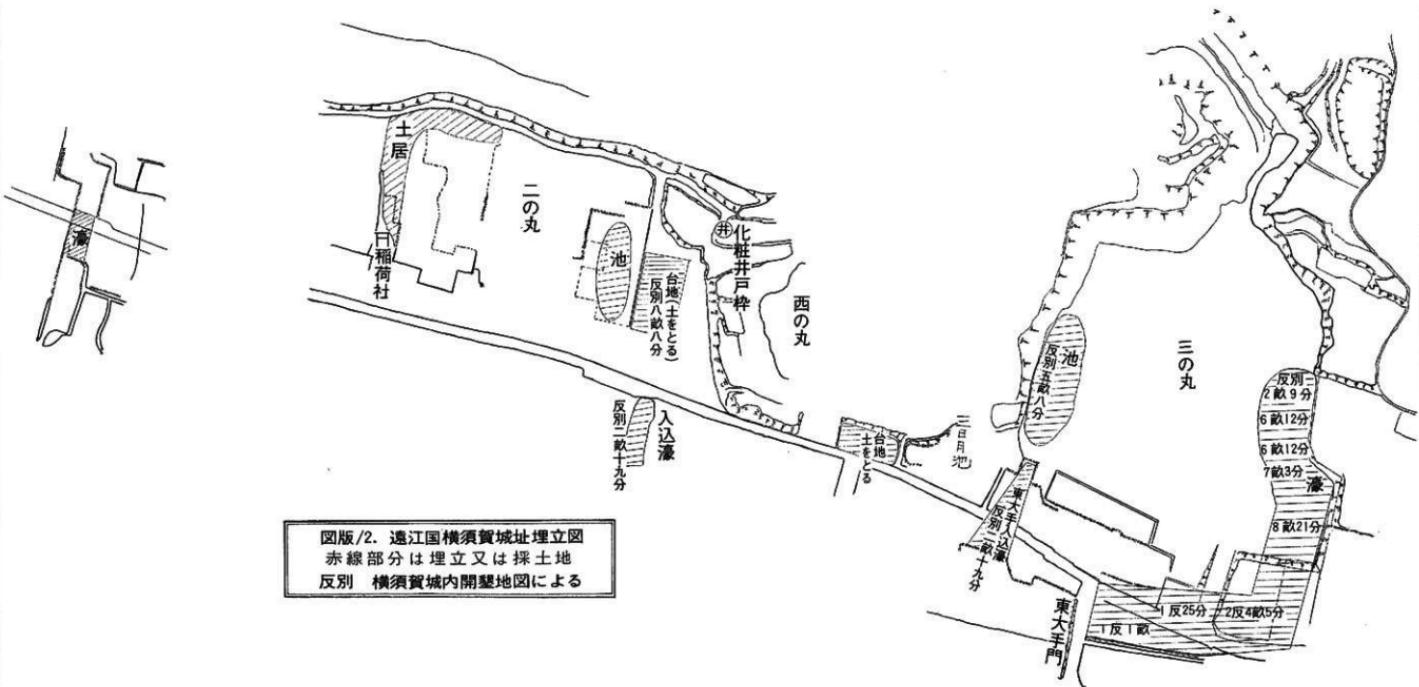
第二節 城址の現状と概要

安
本
村
博

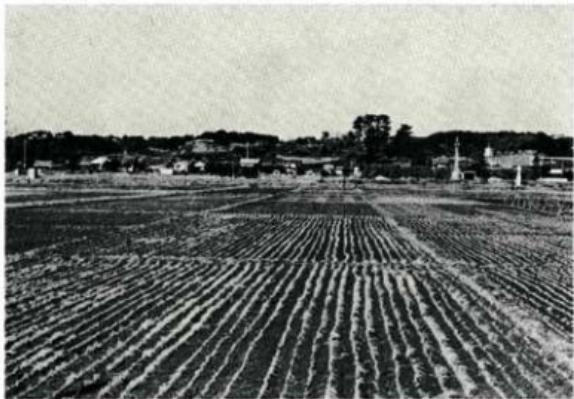
長期間に亘る測量の結果をまとめて完成した実測図は、縮尺五百分の一で、長さ約一尺八十寸、巾約九十寸の大きさのものであるが、この実測図をもとにして凡そ次のような城址の現状をしきことができる。（図版I）

一、城址の形状と規模

南遠小笠の低い山なみが、まさに遠江灘に迫らうとするところ、その突端に天正六年（一五七八年）、徳川家康の命をうけて、大須賀康高によつて築かれた平山城の横須賀城は、北に小笠の連峯を背負い、南は遠江灘に臨み、海岸線を東に進めば、相良に通じ、西に進めば掛塚を経て浜松へ、西北に向れば、袋井、見付から天竜川をこえて浜松に通ずる海岸線の交通、軍事上の要地にあたる地点にある。（写1）



図版/2. 遠江国横須賀城址埋立図
赤線部分は埋立又は採土地
反別 横須賀城内開墾地図による



写1：横須賀城址遠望（写真図版1～2参照）

今この城址を平面的にみると、東西に長く東に開いた三味線の形に似て、南から西を廻り、北にかけて三方を自然の沼沢にかこまれ、東北方の小笠の連峯につらなる部分のみ人工の大空濠で備えを固めた要害の城であり、東西の長さは、東三の丸東端太鼓櫓址のあたりから、西不開門址附近まで、直線で約六百尺南北は各所に於て異なるが、東大手門より北の丸台地の東端をかすめて、一直線に大空濠の西端あたりまで、最も巾の広い部分が約三百五十尺であるが、その要所要所を計測すると南濠より北へ向つて三日月池、天守、北の丸台地を通つて、台地が北濠へ落ち込むあたりまで約二百八十尺、西の丸の西端をかすめて北濠がやや湾曲して城城のくびれたあたりの南北間が約百九十五尺、二の丸附近を南北に結ぶ線は約百九十五尺、西大手門から北へのびて北濠をこえ倉庫址と呼ばれる畠地の西端をかすめた線が約二百尺、不開門址附近を濠あとの石垣に沿つて延長した線の南北距離は約百八十五尺、東西は南濠に開かれた東西大手門間が石塁の面影をのこして約四百二十尺というのがこの城址のおよその規模である。

また城城は東北より西南にかけて、自然の地形のなだらかな傾斜をもつており、東にやや片寄ったところにある天守台を中心には、東南に東大手門、西南に西大手門と二つの大手門を配し、東南の隅には、古國によると太鼓櫓が建ち、東から北へ三の丸、松尾山とつづ



写2：天守台址（写真図版7-1(1)-(2)参照）

き、松尾山の東から北へ廻つて巨大な人工の空濠を掘り、空濠東側にある出丸にも似た台地とともに東北方の山つづきの地形にそなえている。天守より西をひるがえると牛舌状の台地が、西の丸、二の丸となだらかな傾斜で延び、西端に不開門と称する城門を構えて終わっている。自然の沼沢を利用して掘られた城濠は、南から西へ廻つて北側へ三方に繞き、南から西にかけては低い大玉石の石塁を積み、北は自然の土塁がその裾を擣に落している。

二、部分解説

城址の各部分を更にやや詳細に観察調査をすると、東大手門の西北約百六十坪のところにある天守台は、東西約二十八坪、南北約二十二坪の広さをもつ四角形の台地で、南濠の現在水面より約十九坪の高さにあり、東大手門の西約百坪の位置にある三日月池の傍を登り口とする天守台への道をおよそ九十坪ほど登ることによつて到達するが、天守の十徳といわれる城内外や遠方への見通し、武者配り、守備の下知、寄手の監視、非常事態への変化等々、どれを見ても充分な心くばりを伺うことができる。（写1-2）

古図にならつて本丸と記した部分は、天守のある台地より約二坪が低く西南にひろがり西の丸へとつづいている平坦地で、本丸御殿などの建物があつたであろうが、現地では、今それを知る由もないが、広さは、東西約六十五坪、南北三

十畝ほどである。（図版2—参照）

その西につづく西の丸の台地は、東西約三十五畝、南北約五十三畝の広さをもつ本丸とやや同じ高さの台地と、これをとりまく南から西へ廻り北へかけて、一段と低い平地とから成っているが、西側は、最近の土砂採土等により、城址

が著しく破壊されて、築城当時の原型を知るよしもない。（写—3）

更に西方の二の丸は稻荷社より土砂採土地の西端まで約百二十畝、南北は現在の公道の北側部分の巾が北濠の土塁肩まで約九十五畝、公道の南側部分の巾が南濠石墨まで約四十畝で、公道に沿って建並ぶ民家の北側の茶烟の中に、東西約六十畝南北約四十畝の範囲に、各所で直角に屈折して続く、当時の遺構の一部らしい低い石墨が残されている。そして更に西へ延び不開門を構えて城濠は終わっている。（写—4）

他方天守台より東側の構えをみると、東南に拡がる三の丸あとには、最近開発の工場が建ち、全体が整地されるとともに、北の丸から松尾山にかけて、削り落され、当時のおもかげはなく、東大手門に対するあたり、僅かに石墨や土塁が残っていて当時を偲ぶに過ぎず、古図に見える太鼓櫓も、工場の片隅となつてその跡すら定かではない。

（写—5）

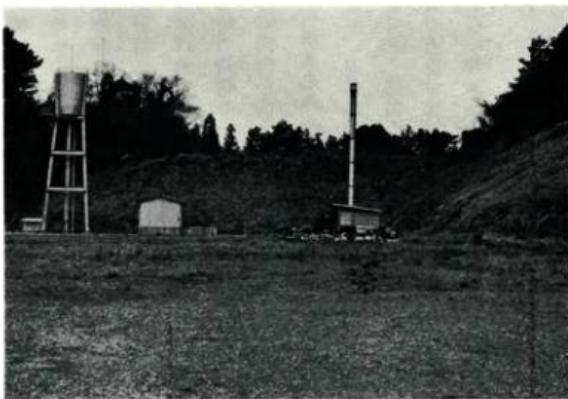


写3： 本丸より「西の丸」、「二の丸」を望む（図版4真4—(1)—(2)参照）



写4：不開門より「西の丸」を望む

十二尺の高さでひろがっているが、その広さは、東西、南北とも約六十尺でムスピ型をしている。この北の丸の北側は城濠に傾斜面で落ち、その肩部には低い土塁が延長およそ九十五、西から北にかけて続いているが、東北は松尾山と称する天守とほぼ等高的台地があり、その登坂



写5：三の丸より天守台を望む

路が巾約二尺で鉤型に山へと登っている。この北の丸は天守台と松尾山の間にはさまれた一段と低い台地で、或いは倉庫などの建築物もあつたであらうが、現在それらしい跡を表面からは認めることはできない。（写—6）



写真 8：北の丸曲輪 (図版写真 9-1-(1)-(2) 参照)

北にのびる台地に統
くのであるが、ここ
に、山を東から北へ
ととりまき、三の丸
から北濠へと鉤型の
人工の大空濠をめぐ
らして東北への守り
を固めているが、こ
の大空濠は肩巾約三
十㍍四十㍍、深さは
崩土によつて浅くな
つた現在でも、十五
㍍以上の巨大な諸薬
研の空濠であるが、



写真 7：松尾山 (一名敵応山ともいう) (図版写真 9-1-(1)-(2) 参照)

うちで、概ね平坦と認められる部分は東西約五十㍍南北約三十㍍の広さがあり、台地上やや東よりの山頂に長さ約十五
㍍、巾五㍍ほどの長卵型の池が残り、この池をとりまき、東側には低い土壁、南側には台地よりの一段低い曲輪の跡が確
認される。山頂の池は現在も水をたたえているが、当時は貴重な水源となっていたものであろう。この松尾山は更に東

当時は箱堀の形に近いものであつたろうと考えられる。（写

7・8）



写真8：大空濠の「三の丸」入口（図版写真10—(1)—(2)参照）

この大空濠によつて切離された東北の台地は出丸とも考えられるが、古図にもその名称の記録はない。松尾山とほぼ等高で、長軸約五十五尺、短軸約三十五尺やや長三角形で、大空濠をのぞく三方は



写真9：東方の台地地形（図版写真10—(1)—(2)参照）

段丘状に高度を下げて、曲輪のあととおぼしき部分が茶烟となつて、何列かひろがつていてある。（写—9）

更にこの台地の東南には東西約二十尺、南北約五十尺ほどの長卵型の巨大な凹地があるが、その役割等について諸説あつて、今もつて確かではないようである。

自然の沼澤を利用して整えられた城濠は水濠を主体とし、場所によっては泥田濠の型式をもつたところもあったと考えられるが、大玉石をもつて護岸されている部分は、南から西へ廻って不開門へと鉤型につづき、各所に隠し濠とおぼしき堀込みを持つているが、北側は土堤型式となっていて石壁は見当らない。古図によれば北濠にも不開門に近い所

に一ヶ所、可成りの

面積の隠し堀らしき

堀込みがあるが、埋

土された現在でも周

開の状況から大略そ

の位置は推定でき

る。（写10・11）

東大手門の西、約

百尋のところに残る

三日月池は、概ね当

時のままの姿をとど

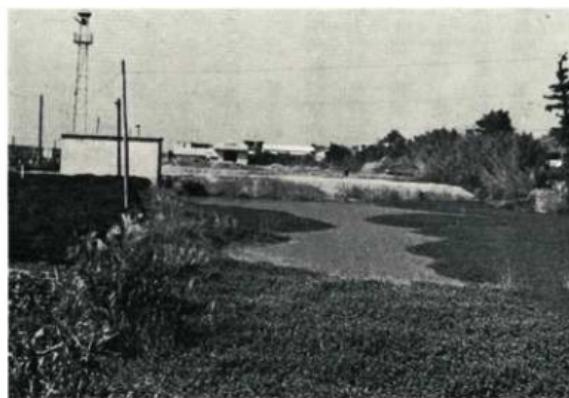
めている勾玉型の小

池で、城内の水源と

して各種の重要な役



写10：外濠不開門から東へ（図版写真12-①-②参照）



写11：外濠（東西大手門に面するところ）（図版写真12-①-②参照）



写12：三日月池（図版写真6—(1)—(2)参照）

割を果していったであろう。玉石と粧土で底と池壁が固められ、当時の土木技術の一端をも知ることができる貴重な史跡である。（写12）以上実測によつて知りえた概要を略述したが、そのほかの各部分の型状寸法等の記しておきたい。

三日月池	長約二十九尺、巾約十尺
城濠よりの水位、三尺高	
天守台道	巾約二尺、延長約九十五尺
隱し濠	西大手門跡の東約五十五尺
西濠	巾約十尺、奥行約二十二尺 (現状)
北濠隱し濠	巾約十七尺、奥行約四十五尺 (現状)
二の丸石積	大玉石望延長約百四十尺
倉庫址	城濠外側、東大手門西南に巾約十二尺三寸、長約六十六尺

城濠外側、不開門東北に巾約二十二尺三寸、長約七十尺
各平地が残つている。

三の丸東南隅の平坦地を太鼓櫓址と称し、古図にも太鼓櫓が見えてゐるが、今その面影はない。

北 南

濠

一面の水田で、僅かに田圃のあぜ道が、概ね城域の土壁の線に添つてカーブを描いて延び、巾約十五尺と三十五尺の城濠を偲ばせている。(写真13)

東南延長約五百尺のうち、およそ半分の二百五十尺は既に埋立てられて水濠の面影はない。

建造物 古國によれば、天守閣、太鼓櫓、本丸御殿、倉庫東西大手門、不開門、その他の建築物があるが、現在の城址には一棟も残存せず、僅かに撰要寺山門に不開門の遺構を見るのみである。(写真14)

尚部分として恩高寺に所蔵されている文政十一年製作になる鬼瓦三個と安政三年製作の鰐三体が横須賀城の貴重な遺物として残されている。作者は三輪村瓦師山本左工門である。

池、井、等 古國によれば、池や井戸が各所に散見できるが、今その跡を地表面で確認できるものはほとんどなく、僅かに二の丸付近の茶畠内に、井戸枠が残るのみである。

太平洋戦争終結後、城郭や城址は封建制の遺物としてかえりみられない時期が続いた。



写真13：北濠遺構（図版写真3-1)-(2)参照）



写14：横須賀城天守閣址

しかし、最近では祖先の史跡の文化的意義を、再確認する意味からも、その価値が高まり、各地の城址の調査が行なわれていることは、誠によろこばしいことである。この時にあたり大須賀町が、町の貴重な歴史的遺産として、天正六年（一五七八）の築城以来明治四年（一八七一）の廢城まで、二百九十三年に亘って南遠の政治、経済、軍事に重要な役割を果しながら、歴史の一頁を刻んだ横須賀城址の調査に取組まれたことは、昭和四十年代における大須賀町の歴史の一頁を飾る事業として後世に残るものといつてもよい。

城はすぐれた祖先の遺した文化の所産であり、すぐれた文化を持っているのは、すぐれた民族でなければならない筈である。

遠州横須賀城は、建造物は何一つ現地に残されていない。しかしその城址は戦国時代末期の典型的な平山城址として、大須賀の人々の誇りとなっているし、進んで保護対策が講ぜられることが望ましい。茶の香りにむせる城址の烟に立ち、雑草や樹木の生い茂る城址にただずんで、戦国武将とその郷土のつわものどもの夢のあとを偲び、それに仕えた先祖の心情を思い起こし、いつまでも、大切に保存していきたいものである。

安 本 博

第一章 横須賀城址周辺史跡の予備調査



写：横裏寺山門（もと横須賀城不開門）

目 次

第一章 横須賀城址周辺史跡の予備調査

... 安 本 博 ... 三四

第一節 大須賀町所在の町指定文化財の対象
となる物件の予備調査 ... 三五

第二節 横須賀城史関係資料の閲覧と調査 ... 三七

第二章 横須賀城址周辺史跡の予備調査

横須賀城址の測量と周辺史跡の予備調査は、併行して行なわれ、二回にわたって、中間報告があり、報道陣に公開された。

昭和四十七年一月二十一日（新聞静岡版中日所取）

近くの寺から文化財

門、書院、シャチホコを再発見

史跡保存、再興を訴える

家康の出世城として知られる横須賀城（小笠郡大須賀町松尾）が宅地造成で破壊寸前に追い込まれ、あわてて町が県理収文化財調査委員安本博氏らに調査を依頼した。このほど行なった調査で、城近くの寺からシャチホコ、城門、書院づくりなど県指定クラスの文化財が統々と発見された。調査グループは県にも報告、史跡としての城の保存と、再興を強く訴えている。

横須賀城は天正六年（一五七八年）、三河から浜松に移った徳川家康が、家臣大須賀高に命じて造らせた平山城。甲州武田勢の攻勢に備えた東の最前線基地で、歴史に名高い高天神城の攻防に徳川勢は大須賀城から出陣。一東海大名だった家康を、戦国大名に押し上げた「出世城」として知られる。明治六年、民有地として払い下げられ解体した。



写1：恩高寺に保存される誠

城の遺構、解体時に分散

ところが七人の地主が土取り場にすることを計画。あわてて町が特つた。をかけ、安本博、神村清、細井淳志郎、鈴木助教授らに調査を依頼した。同調査グループは城址測量に加え付近の寺院も調べた。その結果明治六年の城解体時に分散されたと思われる城の遺構が発見された。

恩高寺からは高さ一尺、幅七寸の三体のシャチホコが完全な姿で見つかった。県内の城から三体ものシャチホコが出たのは初めて。さらに撰要寺には不開（あか）の門、本源寺には摘要（からめて）の門が保存されていた。また善福寺には書院づくりがそっくり移築されていた。調査グループの話では、これらはいずれも未指定だが県指定文化財クラ

スといい、県に報告した。

興味深い「中世武士道」も確認された。初代康高をはじめ、歴代藩主のうち本多氏の墓が、城を一望出来る撰要寺に建っている。「死してなお城を守るため」というのが調査グループの結論。「死してなお」のモーティブ精神の發祥。家康の墓がある久能山東照宮を守る神原康政の墓が最初とされていたが、撰要寺の墓の方が先例となる。康政は大須賀康高の孫に当たり、康政は祖父康高の氣風を継いだものと思われる。

また、城そのものの全国屈指の平山城で貴重な存在であることが判明しており、調査グループは史跡公園としての保存を強く主張。城門やシヤチホコを戻して城を再興することを提案している。

第一節 大須賀町所在の町指定文化財の対象となる物件の予備調査

今回の調査は、横須賀城跡の測量を主目的としたが、この機会を逃しては、町所在の文化財調査もでき兼ねないといふこともあって、町文化財専門委員は精力的に私どもと予備調査を行なった。

昭和四十七年一月二十一日（静岡新聞所収）

自然の利生かし築城

横須賀城 シヤチホコ三体確認

戦国時代における徳川家康の最前線基地、小笠郡大須賀町松尾、横須賀城址の調査は、同町と同町教委、文化財審議会が中心になり、八日か

ら静岡大学細井淳志郎助教授、県文化財専門委員神村清氏、県埋蔵文化財調査員安本博氏らの手で現地調査が進められているが、同町教委がこれまでにまとめたところによると数々の貴重な事実がわかり、早くも大きな成果をあげている。

調査は一月いっぱい続けれられ、二月末までに測量図面と調査報告書を作成することになっているが、これまでの調査で総合調査による成果と埋もれていた貴重な事実が次々に浮かびあがり、県下の城郭研究に

新たな一ページを加えることになった。

中間のまとめによると、地質、地形面から城跡を解明していた細井助教授は、横須賀城が本丸だけ小笠山系の根の上にあって、二の丸、三の丸などは遠州灘の波の力で出来た砂州の上に建設されたことを突きとめた。

自然の地形をそのまま利用して築城されたわけだ。歴史的な面から調査している班は、同城の存在した背景を知るために、周辺の史跡調査を実施した。同町河原崎地区と、昔の城下町の北側に寺の密集地がある。河原崎地区には蓮舟寺、正覚寺、恩高寺、薬院院、旧城下町北側地区には

本源寺、慈承寺、善福寺、林止寺、勝林寺、長円寺等が現存している。これらの寺を見ると、淨土真宗または淨土宗が多く、徳川家に關係の深い宗派。しかも、横須賀城を築城する時に三河地方から移築されたものばかり。徳川家康が宗教の力で住民を説得、城と城下町の基盤を固めようとした意図がうかがえる。

個々の寺には恩高寺、本源寺の山門に同城の城紋があるのをはじめ、同城ゆかりのものが多い。

本源寺の城門は摘要（からめ）門の造構であり、恩高寺にはシヤチホコ三体がある。いずれも時代の異なったもので、一つの城で三体のシヤチホコが残されているのは異例で初めてのケース。

同城は二百九十余年間に二十四藩主が代わっているが、各藩主の家紋を残した鬼瓦が残っているのも珍しい。また同城を見守るような位置に撰要寺がある。同寺には大須賀家、木多家の藩主の墓碑がある。初

代の大須賀康高の方を向き、墓碑の高さも低くなっている。
善福寺には同城の書院が残っている。同寺の大須賀謙規住職は初代大



写1：恩高寺に保存される鬼瓦と瓦当

須賀康高の子孫。家系図や古文書多数が所蔵されている。

これらのことから明治四年神仏混合の廢止と横須賀城の廃城のさい解体され、同城のシャチホコや古文書、家紋をつけた鬼瓦などが各寺に分散して運ばれたもので、善福寺の書院はやはり同じころ移築されたと伝

えられている。

今後は同城を取り巻く通りで（皆社）、城下町の解説のほか、実地測量はすでに終わった本丸、三の丸の一部に引き続き、残り部分の測量に全力をあげることになつていて。

第二節 横須賀城史関係資料の開発と調査

横須賀城跡の測量作業は、困難をきわめ、その調査日程も、大巾に延長されたことは、識者の大方の認めるところであつて致し方なかつた。その間、横須賀城史関係資料の開発、バトロールは進歩し、概ね大須賀町所住の横須賀城関係資料の調査を完了した。（写3—(1)～(2)）

庄屋の記録など発見

横須賀城址調査が一段落

昭和四十七年一月三十一日（静岡新聞所収）



写3—(1) 明治5年5月御用留表書

【大須賀】宅地造成で破壊されそうになつてゐる徳川家康の「出世城」、小笠郡大須賀町松尾の横須賀城址を保存しようと、県文化財調査委員の安本博氏らがさる八日から現地調査を続けていたが、三十日で一段落した。その結果、シャチホコ、城門、移築した書院のほか、横須賀やその城下町の歴史をひもとくうえに貴重な史料となる御用留帳や絵図などが多數発見された。安本氏は、「横須賀城史のほん全部が明らかになつた」とい

これからは同町文化財審議会（松本敏男会長）を中心になってその保存対策を積極的に働きかけていく。

調査には安本氏のほか、県文化財専門委員・神村清氏、静大助教授・細井淳志郎氏、それに同町教委と町文化財審議会が協力、城跡の測量と周辺史跡の予備調査、城史に關連のある史料

調査などを一ヵ月間かけて行なってきたがそれによつて江戸時代歴代の庄屋が城下町の変遷を克明に記録した御用留帳や横須賀城絵図、正徳年間横須賀城下町図などを発見した。いずれも同町役場に今まで全く利用されないまま眠っていたもので、当時の姿を知るために貴重な史料。御用留帳は和紙が使われてありB5判で一冊の厚さが三一五ミリ、元禄元年（一六七八年）から明治六年（一八七三年）まで百九十五年間の横須賀城と城下町のできごとが細かに記録してあり、それが約百冊もある。

絵図は約二十点が発見され、大きいものは縦二尺、横二尺、いずれも掛け軸にしてある。

掛軸用留帳の内容から横須賀城史をよくつきとめることができ、とくに明治六年一月、麻善院によつて城が解体されたときの様子が詳しく示されている。それによると歴代藩主の墓のある近くの寺に解体とともに城門やシャチホコ、書院などが二足三丈で払下げになつてしまつた。城址もそのまま民有地として払い下げられたと記録されている。すでに思高寺にシャチホコ（高さ一尺、幅は七十）三枚、本源寺に掲手（からめて）門、撰要寺に不開（あかず）門、善福寺に書院がそれぞれ保存されているのを確認したほか、同城にゆかりのある物件がまだ數点残つている。

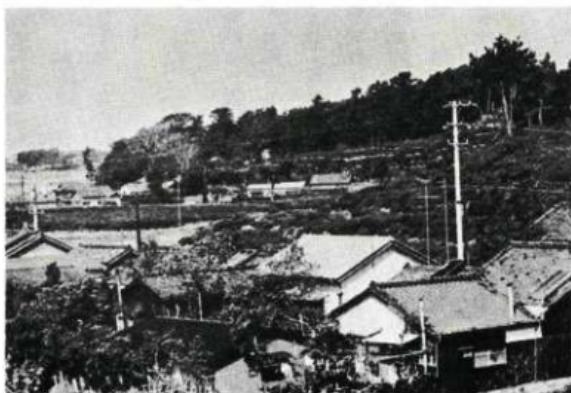


写1-2(2) 明治5年5月御用留裏表書

一方、絵図によつて城の規模（九万二千四百平方メートル）輪かく、天守閣、本丸、二の丸、濠などの位置が正確につかめ、城下町の図では宇一番町から三番町まであつた旗屋敷の町割りなどははつきりしている。また、いま宅地開発で破壊されようとしているところはちょうど城の中心をなす天守閣・西の丸と二の丸の位置に当たることもはつきり、そこは高台で一ひの広さ、九戸の地主が関係している。

安本氏は「御用留帳や絵図が歴史を通じてこれだけ完全に残されているのは非常に珍しい。城史や城下町の様子をつかむ史料としても十分だ。また、完全な姿のシャチホコが三体見つかつたのも県下では初めてで、城門、書院とともに県指定文化財に相当する価値がある」と話し、今度の調査の成果を高く評価している。

第三章 横須賀城址の自然環境



手前右側本丸の西端 遠方摘要寺山
(松尾町火の見櫓より北西方望む)

目次

第三章 横須賀城址の自然環境	細井淳志郎	三九
第一節 城郭とその問題点		四〇
第二節 城郭周辺の自然概況		四一
(一) 弁財天川下流低湿地の形状とその発達		四二
(二) 城下町の位置づけと弁財天川沖積低地		四九
(三) 城下町の土地基盤としての西大谷川扇状地		五〇
(四) 西大谷川押し出し状扇状地と城下町		五三

はしがき

戦国末期の城郭構造とその立地選定については、城の攻防をめぐる戦術上の変化と、領国統一の経営策、および多彩な自然的諸条件によって規制される。本稿は、城郭がいかにして築城され、城下町の変遷において周辺の土地条件がどのような役割を果たしてきたかを景観変遷史的な立場から究明した。その具体的な城郭として、戦国末期の典型的な平山城様式である遠州横須賀城を取りあげた。ここでは、古文書、絵地図、写真、地形、土壤、地質各分布図等の検討および現場踏査を実施し、その実態を把握することに努めた。

第一節 城郭とその問題点

この城郭は、天正四年徳川家康が武田の拠点高天神城の奪還を目的として、急襲、馬伏塚城を廃し、部将大須賀康高に命じて天正八年に築城した歴史的城郭である。初代城主大須賀康高以来、明治二年（一八九六）廢城まで約二九〇年間、井上、本多、西尾各歴代城主の居城でもあった。この城郭は、松尾城または別名両頭城とも呼ばれ、小笠山丘陵南麓標高二〇九m内外の高台にあり、その立地景観上からいって築城様式の中でも典型的な平山城様式であると推定される。

さらに城郭内の施設配置の構造的特色を究明する手がかりに、まず寛文四五年頃の城郭絵図（第七図）を参考として本丸付近の曲輪、土星、仕切門、侍屋敷等二五〇〇分の一の地形図の一部に復原した。その結果、後述する城郭復原推定図（第七図）にみられるような本丸付近の諸施設は、土地の起伏を巧みに利用して、防禦的な配置構造が見出される。これによって中世の城塞様式の遺構が継承されていたものと考えられる。しかも歴代城主は、その遺構を踏襲して城郭内の拡充整備を行つて近世的な城郭様式へと移行した。そのことは正徳三年西尾隱岐守時代の「城郭と城下町」の

古絵図（写六参照）からうかがわれる。しかも内容的には、二重の城郭様式を備えた平山城であると推定される。

さらに城郭景観づけは、先述した裏付理由によつて、戦国争乱期防禦的な様相をもつてはじまつたものと考へてよい。なお、この城郭景観づけの変容は、幕藩体制下における戦術の変化と、領国統治の合理化と相いまつて城主の居館や、領内統治の拠点、あるいは城下町形成の中核として、経営的な城郭景観づけとして面目を一新した。このような景観づけ土地条件すなわち地形、土壤、位置等の基礎を考えざるを得ない。

以上の見解に立つて、横須賀城周辺地域の自然と景観について概略的に述べることにする。

第二節 城郭周辺の自然概況

横須賀城は、小笠郡大須賀町松尾町地内にあり、概略的には国鉄東海道線袋井駅から東南約一二糠、標高二〇m内外、小笠山丘陵南麓の緩線末端にある。その城郭は、東西約六五〇m、南北約三五〇mで東西に細長いひょうたん型を呈している。付近一帯の地形は、地形図の説解と現地踏査によると、大体、次のような四つの異なる地形区分が指摘される。すなわち〔一〕弁財天川下流の平坦な低湿地、〔二〕三輪、柏木、清ヶ谷、小谷田周縁の入江状低湿地、〔三〕小笠山丘陵の傾斜面と、それに刻む谷底平地、〔四〕西大谷川の押し出扇状地などである。（第二図参照）このような多彩な地形のもつ特質条件は、近世以降、横須賀地区の人々の生活過程の裡で多くの影響を与えてきた。しかも河川の氾濫、低湿地の冠水、塩害、山くずれ、河口の閉塞などの災害現象を通じて如実に反映されてきている。

そのことは、当城下町の外延的拡大や、街状的な町屋形成、港町機能の消失、土庶居住の地域分化、さらには在方農村における商品農業の発達、土地開発（新田）の遅速などに直接、間接的な役割を果たしてきている。

したがつて本稿では、地形と城下町の変遷に焦点を置いて、土地空間として冲積低地、扇状地などがいかに形成され、改変されてきたか、それが城下町の構造や機能にどのような役割を果たしてきたかについて、一応、該当地域における自然的メカニズムについて比較考察を試みた。

弁財天川下流低湿地の形成とその発達

横須賀城郭周辺地域は、地形、土壤、地質等の自然的条件によって区分すると、石津、松尾両地区を含めた砂堤地城と、弁財天川下流の低湿地城、そして三輪、柏木、清ヶ谷周縁の入江状低湿地城



図1： 遠州横須賀城周辺地域の地形と城郭の位置図

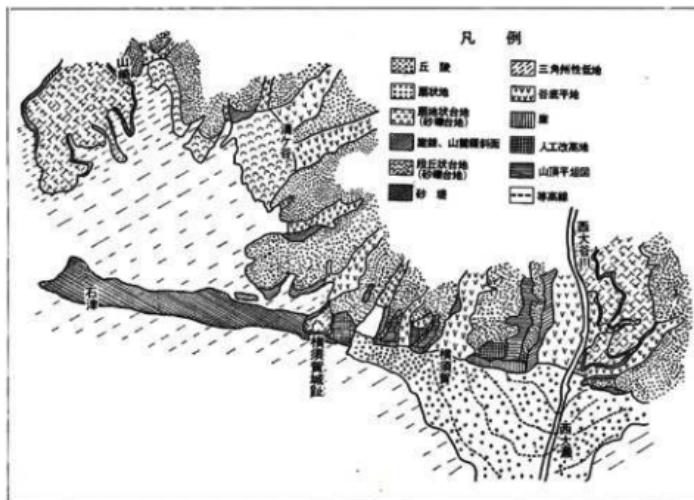


図2：横須賀城周辺地域の地形区分図



写1：伊勢川下流低湿地域

とに大別される。一方、城下町の変遷や港町的な機能面から考察すれば、むしろ弁財天川下流低湿地の形成如何が重要視される。したがって古絵図、地形、土壤、地質各分布図、写真の判定および現地調査などによって、その自然的メカニズムについて概略的に概観することにする。

一般に弁財天川下流地域は、石津、松尾を結ぶ半島状の砂堤以南の低湿一帯である。地形図（二五〇〇分の一）の読解から微地的に検討すると、弁財天川の流路は、ほぼ東南の方向に対角線状に流下し、今沢部落の西方、沖ノ須、中新田を結ぶ東西の砂堤（砂州）列と交叉している。この砂堤列の間隙に西大谷川の押し出状扇状地が入り込んで、一層、低湿地形を複雑化している。とくに河口付近は、等高線の追跡から沿岸流や波浪、季節風などの自然的な營力作用によって東寄りの砂礫の分布形態や標高二〇m内外の砂丘列などが東西にのびている。（写3参照）一方、寛永、正保期の横須賀付近の古絵図によると、海水が湾入して入江的景観を呈していたが、宝永四年の大地震によつて、地盤の隆起、津浪の襲来、中小河川の氾濫などでラグーン化されたともいわれる。筆者はボーリング調査の土壤断面図や等高線の追跡、災害関係の諸記録、さらには、砂堤、扇状地、砂丘の諸配列など、地形図の読解から一概に全般的にラグーン化されたものとは考えられない。

むしろ弁財天川下流一帯は、土地の傾斜地盤の軟弱、河川の運積土関係によつて、江戸末期頃まで浅い海水のラグーン的な地形景観を呈示していたが、集中豪雨に見舞われると、泥海と化しいわゆる常習湛水地域であったものと推定される。（写1参照）

他方、三輪、柏木、清ヶ谷、小谷田、各周縁地域は、先述した弁財天川下流と類似した低湿地を形成し、その周縁丘陵は、円礫から成る平坦な段丘面をもつ砂礫台地で、沖積地とは崖で境されている。先端の山崎、清ヶ谷地区では扇状

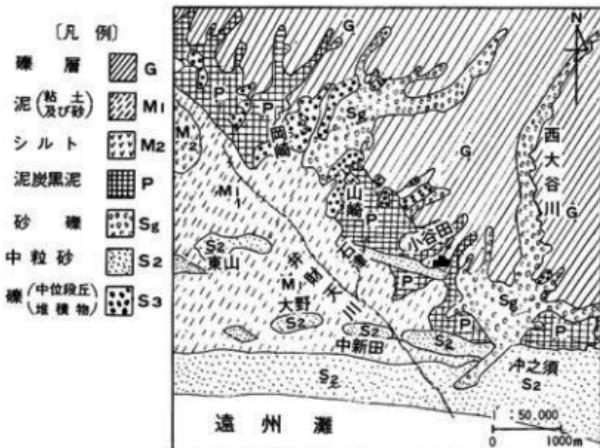
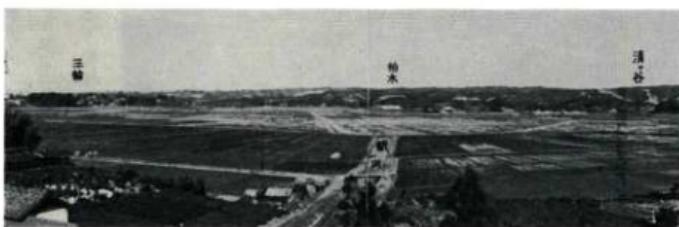


図3：横須賀城周辺地域の表層地質分布図
(土地分類基本調査図第47号磐田・掛塚表層地質図より一部抜粋)

性台地がみられる。しかも入江状に湾入した低地は、等高線二五mのコンターで囲まれた泥炭地を含む盆地状の低湿地である。(第二図)(写2参照)

西低湿地帯は、江戸中期以降、遠州灘沿いの砂丘発達と、その間の大小の地震、津浪をはじめ、先述したような土地条件等によって、急速に入江状から澗状に進化した。その後、丘陵末端、扇状地、谷筋からの湧水や中小河川の土砂堆積作用の促進によって、現在の沖積低湿地帯が形成されたもの



写2：石津付近から北方の低湿地帯と丘陵周縁の三輪・柏木・清ヶ谷各部落を望む

と考えられる。その範囲は、地形図の読図から大部分が三m内外の線で画され、俗に冠水卓越地であった。なお旧新川の河川改修工事の石津現場での砂層と粘土層や泥炭層との異層、その厚さ状態などから(写真4・5参照)洪水、津浪による海水の浸入、その停水期間などが推測される。しかもボーリング調査資料の検討や現地踏査などで地層の厚さ、その巾は次



写真3：海岸寄りの砂丘断面の一部（沖之須付近）

第に南東、北西にかけて傾斜差を示し、これによつて旧河床の在り方も見出される。なお、土壤、地質各分布図に掲示の(P)(第三図)(E)(第四図)の符号地点は一部に海水が浸入し、長期間停水したが、周縁丘陵の谷筋からの土石流、太田川三角洲形成に伴う海水の流入の波瀾で形成された

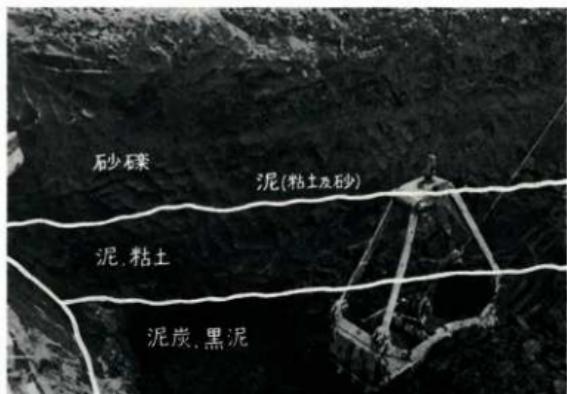


写真4：新川河川改修工事の石津現場における露出地層

地域であると推測される。

弁財天川下流部、中新田と大野、今沢を結ぶ砂堤列付近は、砂丘の移動や河川浸蝕のアンバランス新旧河川の流路争奪によって、旧河道や氾濫原、点状の微高地などが複雑に配列している。しかも冲之須周辺と同様、標高二、三m内外の低湿地を控え、現海岸線から約一糸内外にあり、台風シーズンには、高潮、塩害をはじめ大小の地震による津浪の襲来をうけ、多大な灾害を蒙った地域である。その状態は藩主えの災害に関する訴訟文書からもうかがわれる。

正保、正徳両時代の城下町絵図によると、付近一帯は未だに入江状の海面を呈していたが、近世中期、沖積低地の形成は、金法寺川寄りや、小笠山丘陵南端、旧海食崖麓地域に限定されたものと考えられる。このことは、河川の小規模さによって、潟湖、低湿地の埋没、沖積化の遲延をもたらし、結局城下町の拡大を海岸寄り付近まで延ばし得なかつたものと思われる。



図4：横須賀城周辺地域の土壤分布図
(土地分類基本調査図48号磐田・掛塚土壤図より一部抜粋)



写5：新川石津橋手前旧新川（改修中）

他方、宝永年間、大地震による地盤隆起を契機として、干拓をめぐる低湿地の土地開発が進められた。その素地は寛永年間、本多利長侯時代、柳原十内の大土木工事事業の所産によるが、とくに弁財天川の河川改修による流路の変移や新川、前川の開さく事業など、近世末期の川筋付替等によって災害頻度が安定された。なお低湿地帯は第四紀に属する砂礫、粘土層による肥沃な土壤から成り、すでに米作農業が広範囲に営まれていた。地形図の判読（二五〇〇分の一）や古絵図（正徳年間）からの復原や、土壤断面図の資料や地籍図（土地割）などを手がかりにすると、大体、等高線三九線をもって、乾田と湿田の区域限界線が確定される。その分布は扇状地の扇端周縁と合致するが、川原崎部落周辺の二m以下の湿田地域では、植付後、冠水と高潮による塩害の被害がみられる。しかもこの地域では、灌漑より排水に重点が置かれている。一方、三輪、清ヶ谷、小谷田各地域の入江状の低湿地は、その排水路のルートに弁財天川と新川の堀割をへて弁財天川に結びつけるもののがあげられる。（写5参照）

この地域の排水ルートとして弁財天川は、緩やかな勾配と、少ない河川流量のため、むしろ高潮による海水の逆流や、漂砂の流入が著しい。したがって河口は、しばしば閉塞されたがとくに弁財天川右岸、標高三〇mほどの砂山は、河口閉塞を防ぐため、砂土を集積さ

せ、いわゆる人工的な工法による砂丘である。

〔二〕城下町の位置づけと弁財天川沖積低地

城郭区域は、緩やかな丘陵地と沖積低地との地形的な変換点にあり、眼下に弁財天川の沖積低地と、砂丘の間隙を通じて洋々たる遠州灘を望む絶好な位置にあり、その位置づけから、城下町づくりの領国經營において、如何に平野との不可離な関係にあつたかを如実に示唆するものである。また城郭の立地配置は、まさに戦国乱世期において、その防禦的な役割からいって恵まれた立地条件に適していた。その上、戦国期以来、このような有利な立地条件を踏襲し、他方、江戸への物資交易をめぐる海上交通の中継的な港町関係を兼備してきたことが注目される。宝永年間、大地震、その前後に幾多の中小地震があり、それに伴う津波や高潮、急激な地盤隆起等がみられた。そのため、弁財天川流域は、逐次干渉化し、城下町と外洋との船舶（伝馬船）往来が不充分となり、沖合の本船への水路として、その重要性は低下した。とくに弁財天川河口付近は、沿岸流や季節風によって砂丘列と砂嘴が発達し、水路の堀割も浅くなり、荷易の水運ルートの価値が変容した。そのことは当城下町の繁栄度に大きく左右された。が、城下町周辺の自然的条件は、戦国争乱期において、一つは海上からの攻撃に対する防衛的な有利さを呈していた。すなわち、城郭の西方、あるいは南方一帯の低地は、当時、漏化し、かつ低湿地および泥炭地化されていたでもあった。そのことは戦国期の戦術上、却つて攻撃的には不可能に近かった。他方、城郭の背後は、小笠丘陵南端部に含まれ、南西方向に稜線が傾斜し、その高度も低く、谷底平地が稜線の間隙をぬつて奥深く侵蝕されている。しかも峯越えで高天神城に迫り、いわゆる間道ルートとして好適であった。江戸初期は、東海道から離れていて脇街道沿いの城下町であったにもかかわらず、本田利長侯時代には城下町の最も繁栄をもたらした。その要因の一つには、南遠地方から産出する甘蔗、甘藷、棉、塩、干魚類

を江戸、駿府各方面に回漕する港町であり、また、領国經營の中板地であったことによるものである。とくに城郭が丘陵の高台に立地するのは、領主として権威の象徴を示すものであるが、むしろ眼下に眺望する広大な沖積低地の土地生産（年貢）関係に基づくものと推察される。

以上の諸点から城郭周辺の低湿地は、戦国期では防禦的な有利条件をもたらしていたが、近世中期には、水路開設を通じて、海上交易の中継的な機能を促進し、城下町の発展と、その拡充化をもたらした。江戸中期以降、宝永地震を契機として、急速に渦、沢地が陸地化し、土地開発（干拓・新田）が促進された。その結果、旧河道沿いや、微高地、砂堤の一部には、棉作、甘藷、茶、甘蔗など商品作物が栽培され、次第に農村の商品経済化が推進された。したがって、城下町と農村との関係は、商品作物の生産や流通をめぐって矛盾対立のきざしをもたらした。そのことは、江戸末期、市場への物資輸送の不便と、商圈の縮小と相まって、城下町の繁栄は停滞の一途を辿ったともいえる。

〔三〕城下町の土地基盤としての西大谷川扇状地

近世以降、横須賀城周辺地域の中で、城下町の人々の生活空間の中心は、西大谷川の押し出状扇状地である。まず西大谷流域の地形的な性格について、一応、地形、地質、土壤各分布図や、現地調査等の諸資料によって微地的な考察を試みることにする。周知のように、西大谷川は、小笠礫層から成る小笠山丘陵の山稜線、標高二〇〇m内外の旧城東村の境の山地に源を発し、南北に傾く丘陵傾斜面に沿って、ほぼ南北性に流下している。その上流、中流部は山地の開析が進み、急勾配の土地が多く、下流部にかけて局地的に小規模な河岸段丘を形成している。然も川原町と十六軒町を結ぶ地点、すなわち新橋付近（二五〇〇分の一地形図参照）において、急に河谷の巾が広がり、標高一七〇m以下の扇状地性冲積低地を現わしている。他方、これとは対照的に新橋付近の堤防から北方の山地、丘陵を眺望すると、河床



写6：西大谷川の天井化の姿

高い、いわゆる天井川化した河川と、（写6参照）土石流や砂礫の堆積が目立つ谷底平地がみられる。したがって西大谷川流域は、新橋附近をもつて地形的には、一応、谷底平地と扇状性冲積地とに大別される。（イ）先述したように西大谷川流域は、旧城東村境の小笠山丘陵の稜線、標高二〇〇m内外に源を発する西大谷川上流一帯である。その河川延長は約八・五キロ、その間、小笠山丘陵の各稜線の谷筋から溪流を合わせて、ほぼ南北の直線状に流下している。下流部では、西大渕と沖之須砂州地域の中間を大きく西方寄りにやや斜めに蛇行して、弁財天川に合流して遠州灘にそそいでいる。（第一図参照）この流域は、概して急勾配な山腹をなし、丘陵の開析谷は、山稜線の傾斜と同様、西または南方向に傾斜を呈している。

なお谷密度は100kmの2以下で、旧城下町の背後、旧海食崖地域には一般的の山稜線より、一段と低い山稜上に緩斜面が細長くのつていて、その表層は、厚さ二〇一四〇m程度の礫交りの赤橙褐色土層が見らる。〔参考圖〕集中豪雨などで大規模に崩壊され、谷間の溪流に対して多量の礫を供給している。また礫層の崩壊跡には切り立った急崖が形成され、しかも開析された谷底は厚い土石流の砂礫で埋められている。その礫は溪口部まで流下し、一層河床を高め最下部付近では、一般に一一m以上の天井化を現わし、同時に押し出状扇状地を形成してい

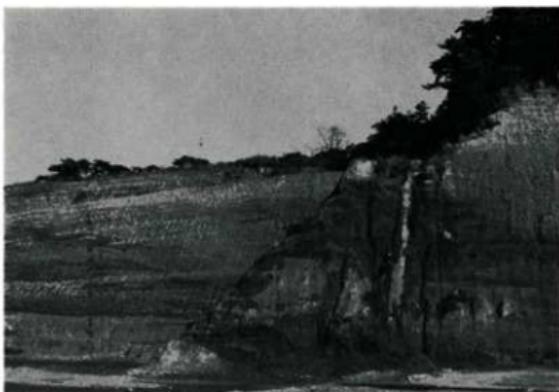


写真7：三熊野神社裏山土壤断面 (横須賀高校運動場東側)

一方、西大谷川の河岸段丘は、いづれも一一七mの厚さをもつ小笠礫層の再堆から成り、土壌は、横須賀高校の裏山の土壌断面（写真7参照）にみられるようにほぼ全層黄褐色を呈している。丘陵周縁には、小面積の低位段丘面がみられ、上流部には、西大谷池と呼ばれる人工的な貯水池があり、西大谷川の土砂堆積に伴う自然流下に対する調整を目的とした改修ダムである。

河谷一帯は、等高線の曲線走向からみて、中流から上流にかけて次第に高くなり、しかも急傾斜面は龍眠寺、西大谷、普門寺を結ぶ側の方に多い。また河川縦断面からも大きな遷急点がみられる。その要因として地盤の隆起運動、ないしは土石流、山くずれなどの埋積作用が考えられる。西大谷川流域では、ほとんど溪流が南西の方向に流れている。そのことは、傾斜運動や土地の隆起と相いまつて、比対称な運動がおこって大量の堆積物を押し出した。その結果、南西方向の細長い堆積谷が形成されたものと考えられる。その層相は、ほとんど砂や礫から成り、互層との不整合はみられない。したがつて何回かの連續的な土石流による成因ではなく、むしろ各溪流ごとに一、二回の一時的大流出によつて形成された可能性が強い。

河谷の土石流の表面には二三に及ぶ転石が諸所にみられる。今後、上流部の西大谷池付近にかけては、集中豪雨によつて一時的出水に見舞われ、土砂の移動に伴う災害の危険が予測される。

要するに西大谷川流域は傾斜運動にもとづく構造谷の性格を有し、その上、破碎的な河谷地形が卓越している。上流から中流部にかけては、小規模な河岸段丘や旧河道の形跡など多彩な自然景観が展開している。

四 西大谷川押し出し状扇状地と城下町

既述したように、城下町区域の土地基盤は、殆んど西大谷川の土砂運搬や、堆積によつて、逐次三角州低地を埋没した、いわゆる押し出し状扇状地である。その當力の主軸をなす西大谷川は、その流域面積が小さく、自然堤防はわずかに二、三ヶ所にすぎないが、西大谷川の天井川的なきぎしは、近世期、城下町を水害から防禦するため、数次の堤防嵩上げが行なわれ、その結果、町屋あるいは、耕地より河床が高められたものである。事実、現地踏査や地形図の解説からみると、西南の傾斜運動にもとづく、地形の傾斜関係がみられる。河川の氾濫、流動は、等高線の追跡によつて、東番町から西大渕方向に展開している。なお、西大谷における河川從断面の傾斜状態からみても、東側の隆起が目立つてい

る。

次に二五〇〇分の一の地形図読解によつて、城下町形態との関係について考察する。愛宕山麓下→三熊野神社→新橋→善立寺を結ぶ線を限界にして、その以南は、典型的な押し出し状扇状地に含まれるが、その形態は、等高線の追跡によつて同心円状の屈曲状態が見出される。その間隔は、大須賀中学付近から下流部にかけて、左岸よりは右岸の方がその巾が広い。そのことは、土砂の運搬が多かったことを裏付けるものである。その状態は、西大渕の宝珠寺付近の砂堤(砂州)列まで連続している。新橋付近では、三一五m内外の河床高さを示し、多量な砂礫が堆積していることが推測される。

しかも変形的な同心円状の等高線の形態と、土地利用との関係によって、大体、扇状地の範囲は一致し、その扇端は西大渕公民館付近と考えられる。

なお西大谷川河谷から押し出す土砂の堆積作用と、奥の谷（寒泉寺）、倉の谷（本源寺）各河谷から押し出す土砂の堆積作用との營力的な不均衡関係によって、三角州低地の埋没や砂堤の形成などの地域的な遅延差がみられる。また西新町から中本町を経て十六軒町にかけて、いわゆる街状町屋の外延的な展開にも大きな影響を与えてきている。したがって集落立地基盤として、土壤、地質的メカニズムについて、ボーリング調査資料（土壤試験断面図）や、現地の聴取調査などによって究明を試みた。区域内の土層の厚さ、砂礫の大きさ、その包含率の湧水の立地などから異なる地層や土壤の堆積的な不整合状態が認められた。一応、地形変遷的な立場上次のような海→澗・沼沢地→三角州・扇状地（山上）→沖積低地など一連の模式関係が浮彫される。

現在、外見的には沖積低湿地と扇状地に大きく分けられるが、内部的なメカニズムからいって、複雑な地形地域である。近世期、人々の生活舞台として土地空間の役割を推測すれば、殆んど扇状地、またはその周縁沖積低地があげられる。そのことは、正徳三年古地図にみられる城下町周辺の土地利用景観、例えば塩田、耕地、寺院、堀割、水路などの分布から立証される。なお地形図の復原から西大谷川扇状地の範囲をみると、概して大きな規模に類するものといえる。そのことは、上流域の集水区域と扇状地区域との関係について、一万分の1の地形図の判読から検討を試みると、新橋（仮りに扇）から水源（寒翠の上流）地まで直線距離は、約五三〇〇m、新橋から西大渕公民館付近（端）まで約七〇〇m、その距離関係を比較すると約七・五倍にも達する。また新橋から弁財天川の交流点までの距離は、約二〇〇〇m（一万分の1地形図）その差引約一三〇〇m、また新橋から大須賀中学の校庭付近まで約五〇〇mの距離内にそれぞれ展開している。

現地踏査によつて西大谷川の河相は、河谷周縁の地形すなわちその傾斜、土石流、砂礫、堆積の在り方や茶畠、宅地等の土地利用分布などから、氾濫原を含む小規模な新旧扇状地の形成があつたのではないかと推測される。その地域区分は、ほぼ中学校付近を頂点に三熊野神社付近の東本町から新屋町、東番町、さらに十六軒町、川原町を結ぶ地域区とその外縁にある中番町、東番町から西大渕、そして大須賀町役場付近にかけての地域区に大別される。ここでは、便宜上、前者を旧扇状地、後者を新扇状地とするが、新旧相互関係は、距離的な数値から大体一対三の比率を示している。このような距離比率からいって西大谷扇状地は、典型的な押し出状扇状地の性格を呈している。その形成は、徳川中期以降、急速にその拡大が促進されたものと考えられる。

近世中期以降、横須賀城周辺地域における土地開発の重心は、地形的に弁財天川下流一帯をはじめ、西大谷川押し出状扇状地およびその周縁沖積低地に限定されていた、その後、干拓をめぐる農業土木技術の発達に伴つて、扇状地から沖積低湿地へと、土地利用の変遷からも推定される。近世期には、広大な土地空間、弁財天川沖積地は、地形的に土地が低く、冠水、洪水、高潮など水の災害に深い因縁をもつ自然的マイナス条件が顕著であった。他方、西大谷川押し出状扇状地は、土地の範囲も狭いが、豊富な湧水に恵まれ、地形的には起伏が緩やかで、地味は肥沃、中世以来、稲作中心の土地開発が促進されていた。したがつて、当城下町の機能は、港町として活気を帯びた時代、そして地震に伴う港町の機能が衰退した時代では、扇状地、沖積低地への土地開発の遅延化が異なり、同時に領国經營の財政上、交易か、農業（年貢）いづれかに重心が置かれたかによって大きく左右される。このように歴史的な発達段階に対応して、次第に排水路、河川改良工事、土地区画整理等が着々と推進された。その結果、現在みられる見事な美田と化したが、それは、

まさに三万石足らずの横須賀領民の自然改造への努力の所産ともいえるであろう。

参考文献

- 一、土地分類基本調査 地形・表層地質・土じょう 筑田・掛塚、五万分の1 國土調査
一、大庭正八 東南海地震に見られた遠江地方の家屋被害分布と地盤との関係
一、静岡県(一九六二) 中遠地区産業基盤調査報告(総括報告書)
一、多山文男(一九四三) 遠州灘沿岸横須賀付近の海岸地形—歴史時代に隆起せる砂丘
と干潟との一例 地理学評論 N. 12
一、鳥海司郎(一九六〇) 静岡県太田川水系電気探査報告、静岡県工業試験場報告 N. 4
一、多田文男・入江敏夫 遠州横須賀付近干潟の地下水の諸性質と、その遠州灘地震による変化、資源研究彙報(十二)
三井嘉都夫
- 追記 第二回、横須賀城周辺地域の地形区分図作成において、現地調査及び種々御教示をいたいた英和女子短大助教授北川光雄氏に厚く感謝の意を表するものである。